

奥平昌邁の米国留学と福沢諭吉

小川 正道

- 一、はじめに
- 二、奥平家の資産管理
- 三、中津市学校の設立
- 四、奥平昌邁の米国留学
- 五、むすびに代えて——社会主義批判の先駆者として——

一、はじめに

福沢諭吉の旧主である旧中津藩主・奥平昌邁は、安政二年（一八五五）に宇和島藩主・伊達宗城の四男として江戸に生まれ、文久三年（一八六三）、中津藩主・奥平昌服の養子となった。慶應四年（一八六八）、家督を相続して中津に赴き、版籍奉還に伴って中津知藩事となるが、藩政を大参事に任せて東京での勉学を希望し、明治四年（一八七二）二月二十五日に十七歳で慶應義塾に入社した。成績は明治四年四月から六月までが「等外」、七月から八月までが「文典会読」、九月が「第十二等」であった。⁽²⁾ 福沢は、入社にあたって慶應義塾構内の住居を

提供するなど、奥平の世話を焼いた⁽³⁾。そして同年十二月、奥平は福沢の勧めで小幡甚三郎を随行者として米國に留学する。

福沢は普段、平等を主義として爵位の差別など眼中になかったが、旧藩主に対しては殿様、何々様の敬称を用いて主従の礼を守り、毎年元旦には紋付き羽織袴の正装で旧藩主家に赴き、年賀の祝辞を述べていた⁽⁴⁾。とりわけ第十代藩主・奥平昌暢の正室・芳蓮院には終始、旧家臣の礼をもって丁寧に仕えた⁽⁵⁾。芳蓮院は一橋家の出身で、一家の尊崇を受けており、長老の島津祐太郎(復生)が福沢に信服して芳蓮院に福沢から聞いた西洋の話⁽⁶⁾を伝えていたため、芳蓮院も福沢に関心を持ち、会ってみようということになり、それから次第に信用を得ていったという。

明治五年に福沢は中津に帰郷し、後述する中津市学校を視察し、奥平家の東京転居を実現させたが、これも昌邁は義塾に留学していたものの、先代の昌服をはじめその家族は廢藩後も依然として中津に住み、大名風の生活をしているため、「費用が非常に多く此儘では家の維持が覚束ないといふ」理由からであった。旧藩主家が旧藩地を去ることは士族たちの喜ぶところではなかったため、「疾雷耳を蔽ふに違あらず、僅か六七日の用意で、老侯を始め家族一同中津の海浜から舟に乗り出発して上京の途に上つた」。こうした強行軍が実現したのも、福沢が芳蓮院や島津などから信用を得ていたためであった。奥平家の上京後、一時的に福沢は奥平一家を三田の邸内に仮住まいさせ、芳蓮院はしばしば福沢のもとを訪れたという。福沢は明治六年四月十五日付の島津祐太郎宛の書簡で、「奥平御家族様、三田え御引移後、御居合も宜敷、何も心配は無御座」と報告し、貴賤の別、性別に関係なく「無為と申は心身の大毒」であるとして、奥平邸の一角に「細工場」を設け、「おひめ様も下女も内職を為致候積りなり」と職業教育を始めたことも報じている。これも、「何か手掛り無之ては大名風の旧弊を洗ふことは出来不申」という意図からであった⁽⁸⁾。明治九年七月十一日、昌邁が旧出羽山形藩主・水野忠弘の妹・静子と

結婚式を挙げた際には、その祝文で福沢は、「婚儀の鄭重にして旧大名の遺風を存するは之を愚と云ひ、御住居の粗にして台所の野なると御入輿の簡易にして御同勢の寂しきは之を智と称す可き歟……今の華族は昔の大名に非ず。此住居も或は美大に失したる処あらん、此入輿の御供連れ御土産等も或は分に過ぎたることあらんと思ふ程なり」と苦言を呈している。⁽⁹⁾

明治二年の版籍奉還によって、旧藩主は知藩事に任命され、石高の十分の一が家禄として認められた。中津藩の場合石高五万三千石で、奥平家の家禄は五千三百石、当時の米相場で約一万七千両であった。福沢は明治二年八月に奥平家からの禄米の支給を辞退しており、当初は藩政に携わることもなかったが、明治三年十一月に大名華族の東京移住が命じられ、先述の通り奥平が慶應義塾に入社し、その家族も福沢の尽力によって東京に移住される頃になると、藩と密接な関係を持つようになり、島津祐太郎や芳蓮院など旧藩の有力者からも信頼されて、東京移住を断行した。福沢は奥平家の資産を運用する立場となり、旧藩時代の御用商人との関係を維持しつつ、資産運用の拠点としてこれを利用した。資産運用の具体例としては、神戸に土地を購入したり、地券を担保に貸し付けを行ったり、米国に投資したり、といった取り組みを行っている。資産管理は福沢と小幡篤次郎、桜井恒次郎、荒尾茂、梁雅路の五人による評議体制で担われていた。⁽¹⁰⁾

本稿は、福沢がいかに奥平家の資産管理に関わったのか、また、その投資先であった中津市学校がどのように設立・運営されていたのかを踏まえた上で、奥平の米国留学の動機や経緯、過程などについて、できるだけ詳細にあきらかにしようとするものである。教育や産業などの振興を中心とした大名華族の地域社会との関わりは、近年、研究上の注目が集まっている点であり、大名華族の海外留学もまた、廃藩置県前後の新たな実践活動として、検証が進められてきている。⁽¹¹⁾ 本稿はこうした研究上の動向を踏まえて、旧中津藩を対象とした事例研究を学界に提供しようとするものである。なお、奥平の留学については、これまでその随行者であった小幡甚三郎の留

学に関して論じた西澤直子氏の成果がみられるものの、奥平本人については、正面から論じられたことはない。⁽¹²⁾ 奥平は中津市学校の設立と留学を同時に申請しており、両者は不可分、あるいは表裏の関係にあった。そこで本稿では、奥平家の資産管理について検討した上で、中津市学校の設立と奥平の留学の過程について、留学後の奥平の活動も視野に入れながら、総合的に論じていきたい。

二、奥平家の資産管理

奥平家の資産管理を担った福沢を支えていたのは、近世以来の君臣の情誼ともいべき感情であった。明治十六年に中津士族の互助組織・天保義社内です族間の対立が発生した際、福沢は紛糾の解決を期待する書簡の中で、「中津の士族共が何と喧嘩するも、勝手二任して無頓着なれ共、唯当地に而奥平様へは御近く敷仕、如何にも其末々を御案し申上候より、唯奥平様之御後図、又近く八目下之芳蓮院様、御隠居様（奥平昌服―引用者）御生涯丈ケニ而モ、旧大名らしく御暮し之出来候様ニと、一筋二存奉候而已ニ御座候。斯る次第なるが故ニ、後図之資金を支配する人に者、可相成丈ケ敵をツマを作らざる様ニとの考えなり……奥平様之御身代を愛する而已」と記している。⁽¹³⁾

福沢や小幡篤次郎は家職等に助言して、大名風の生活を一変させ、子女の教育費以外は節約して資産の維持増殖を計ろうとしたが、上京後も一家の大名風の生活は容易に改まらず、明治の世も安定して東京に奢侈の風潮がはびこるようになる⁽¹⁴⁾、家計の緊縮は一層困難となり、福沢は一家を中津に帰郷させる必要を感じるようになった。⁽¹⁴⁾ 福沢の明治二十一年四月五日付山口広江（元中津藩少参事、第七十八国立銀行頭取）宛書簡によると、中津市学校（後述）を再興させることについて相談するため、上京した旧中津藩士の菅沼新五右衛門と新庄関衛を前に

福沢は、「一通り話承候上にて、此方より奥平家の事情を篤と語り、学校など気楽なる時節にあらず、奥平家の存亡は何とするやと、懇々事実を話し候処、両氏も大に悟りたる様子にて引取り候」という。福沢は、奥平家の家計維持のため、当主・九八郎（昌恭）（昌邁の長男）を中津に帰郷させるべきだと考えて実現させたが、それでも家計への危機感は強く、同書簡には「奥平の御勝手方々歳なれば兎も角なれども、実に危き次第にして、此ま、に参れば今後十年にして根本を欠くの端を開き、二十年にして皆無の滅亡に至るべきは、火を見るよりも明らかなり」とある。さらに福沢は、中津の士族は「気楽」に過ぎ、忠義忠義と唱えながら大名時代から何も変わっていないと嘆息して、九八郎だけでなく、他の奥平家の人々も帰郷させるべきであり、「此儘東京に居れば奥平家は恐れながら皆殺しなり……決して猶予すべからざる事に存候」と主張した。こうした危機感の背景には、東京における華族の奢侈にふける生活ぶりがあると福沢は考えており、「尚以近來東京の奢侈は誠に恐ろしく、余程の気力ある者にあらざるより以外は、逆も此風潮に反対して家を保つを得ず。況や無力無且の華族をや。遠からず滅亡に瀕することならん。久留米の有馬も家計に大変動を生じたるよし、淀稲葉も六ヶ敷よし、其他枚挙に遑あらず」と述べ、帰京後も「金は決して費すべからず……御部屋杯出来に不及、和田氏の一室にて沢山なり。普請三味一切無用」と提言した⁽¹⁵⁾。

福沢は、まだ十一歳であった九八郎に対して、明治二十一年五月十四日付で書簡を送り、帰郷後の当主としての心得を論じた。人と接する際はなるべく礼儀正しくし、名前を呼び捨てにしたりしてはいけない⁽¹⁶⁾、「中津と申八旧御城下二而、決して淋しき処に無之、殊に御旧臣ハ沢山」であり、東京は友達も多く楽しいから帰りたくないかもしれないが「是れハ人にして弱き事なり」、西洋留学をして五年も十年も一人で学問する者も少なくなき、東京と中津は隣同士のようなものなのだから、「決してよはき事を御意なされざるやう御心掛相成候度、世間の笑はれものニ可相成候」と福沢は論じている。「此度の中津へ御出ハ、奥平の御家を永く堅固に致して、御成長

後、立派に御一家を御支配被成度との趣意ニ御座候。即ち御先祖様へ之御奉公に候間、決して御我儘ハ相成不申⁽¹⁷⁾と述べている。

こうして福沢は旧臣としての忠誠を尽くしながら、その持論である大名華族帰郷論⁽¹⁸⁾を、地元・中津において実践していったわけである。

なお、奥平昌邁は常に福沢に忠実だったわけではなく、福沢が岩倉具視に提出した建白書「華族を武辺に導くの説」が回覧されると、反対の意を述べ、第十五国立銀行の株所有をめぐつても、自由を制限したい福沢に対して、反対の意を唱えたといわれている⁽¹⁹⁾。ただ、中津への洋学校設立と奥平の海外留学については両者の意図は一致していた。中津市学校の設立と奥平の米国留学とがこれである。

三、中津市学校の設立

明治四年九月二十日、奥平昌邁は東京府に対して次のように申請し、中津に洋学校を設立することと自らの洋行の許可を求めた。

臣昌邁儀累代無量ノ 天恩ニ奉浴剋幼弱ノ身ヲ以叨辱高位実ニ聖沢ノ深不知所謝依之之春来願ノ上 闕下ニ在留勤学仕り側ラ時機ノ転換其及ス所ヲ熟察仕候ニ今ヤ欧州ハ文明開化万国ニ冠トシ治教ノ道ニ随テ盛大殆ント五州ニ卓越スルノ由伝承仕り知事在职ノ初洋学校開業ノ儀種々苦心罷在候処幸ヒ福沢論吉小幡篤次郎小幡甚三郎等皆臣カ旧管中津県生国ノ者ニテ篤ク賛成致呉粗其体裁モ相立居候事故何卒於中津県下開業為仕候度右ニ付テハ是迄下賜候家禄ノ内五分ノ一右学費ノ為永献禄仕度其上ニテ臣昌邁儀ハ未滿弱冠固ヨリ不肖ノ身ニ候ヘトモ乍不及自費ヲ以洋行仕り勤学勉勵彼ノ実地ニ慣レ乍聊知識ヲ拡見聞ヲ遂ケ他日鴻恩万分ノ一ヲモ奉報度志願ニ御座候然ル処当九月ハ先般御達ノ通り旧知事ノ者

朝集期限ニ有之甚以奉恐入候へトモ前件奉申上候通り不得止ノ微衷時務ノ急ナル御垂憐被為在願ノ通被 仰付候様仕度就テハ兼テ奉願置候通り老父昌服儀積年ノ痼疾ニテ取臥罷在候間不取敢暇乞旁先方二十日ノ御暇奉願申津泉迄罷越急速帰京ノ上航海仕度仰願クハ前文ノ次第御聽届被為在至急御差図被成下置候様仕度只管奉懇願候誠恐惶頓首謹言⁽²⁰⁾

知事在職中から洋学校の開業については苦心してきたが、福沢諭吉、小幡篤次郎、小幡甚三郎等の旧臣の賛成によって体裁も整ったので、これを開業して家禄の五分の一を投じ、さらに自費をもって洋行し、勤学勉強にはげみ、実地に慣れて知識見聞を広げたい、というわけである。この申請を受け、洋行についてはすぐに許可され、洋学校開業については一旦保留となったが、奥平が督促したところ、十月二十八日をもってこちらも許可された⁽²¹⁾。福沢は、華族が教育に従事すること、そして学校設立に投資すること、という持論を有しており、これはその実践ともいべきものであった。奥平の留学も、福沢の勧めによるものであったといわれている⁽²²⁾。

この間、十月八日に明治政府は旧藩知事に対して太政官第五百二十六号達を発し、「方今宇内開化之時実用ノ材ヲ養ヒ候事最急務ニ候殊ニ華族ハ四民ノ上ニ立衆人ノ標的トモ可相成儀ニ付今般一同輩穀ノ下へ被召寄親ク中外開化ノ進歩ヲ察シ聞見ヲ広メ智識ヲ研キ国家ノ御用ニ被為充候御趣意ニ候条各奮発勉勵可致事⁽²⁴⁾」として、開化進歩のための智識の研磨、国家への貢献を求めていた。十月二十二日、明治天皇は華族一同に対して勅諭を発し、「朕惟フニ宇内列國開化富國ノ称アル者皆其國民勤勉ノ力ニ由ラサルナシ而テ國民ノ能ク智ヲ開キ才ヲ研キ勤勉ノ力ヲ致ス者ハ固リ其國民タルノ本分ヲ尽スモノナリ今我國旧制ヲ更革シテ列國ト並馳セント欲ス國民一致勤勉ノ力ヲ尽スニ非レハ何ヲ以テ之ヲ致スコトヲ得ンヤ特ニ華族ハ國民中貴重ノ地位ニ居リ衆庶ノ属目スル所ナレハ其履行固リ標準トナリ一層勤勉ノ力ヲ致シ率先シテ之ヲ鼓舞セサルヘケンヤ其責タルヤ亦重シ是今日朕力汝等ヲ召シ親シク朕カ期望スル所ノ意ヲ告クル所以ナリ夫レ勤勉ノ力ヲ致スハ智ヲ開キ才ヲ研ヨリ外ナルハナシ智ヲ開

キオヲ研ハ眼ヲ宇内開化ノ形成ニ着ケ有用ノ業ヲ修メ或ハ外国へ留学シ実地ノ学ヲ講スルヨリ要ナルハナシ」との勅諭を与えている。華族が国民の模範となつて、外国へ留学するよう求めるものであつた。⁽²⁶⁾ 華族に先駆けて、皇族の海外留学がすでに進んでおり、明治二年には東伏見宮嘉彰親王が海軍留学したいと申し出て許され、三年から英国に留学していた。明治三年には華頂宮博経親王と伏見宮能久親王も留学申請をして許可されており、石附美氏は、こうした皇族・華族の自発的な留学への期待が、留学の勅諭の背景にあつたことは否定できない、と指摘している。⁽²⁷⁾ 勅諭の前に申請した奥平の例も、勅諭の渙発を後押ししたのではないだろうか。いずれにせよ、奥平の申請はこうした政策に先駆けるものでもあつた。すぐに許可されたのは、そのためであろう。

さつそく明治四年十一月、中津の「洋学校」として中津市学校が開設される。奥平の申請通り、家禄の五分の一として約一千石が投じられ、さらに中津士族の互助組織である天保義社から二万両が投資された。二万両のうち五千両は開学にあたって必要な書籍や器械類の購入にあてられ、残り一万五千両を基金として年利を一割と見込み、千五百両を毎年の収入にあてた。家禄は金額にして三千五百両であり、あわせて五千両が運営費となつた。入社金は金二両、道具金三分、毎月の月謝が一両二分、書籍借用料が三朱から一分などと定められ、授業料は慶應義塾の規程にほぼ準じた。奥平が申請書で述べていたように、福沢や義塾はその組織作りに積極的に協力し、学校の規則類はすべて「東京三田慶應義塾之規則」(「慶應義塾社中之約束」)に従つて定められた。もっぱら英語の原書によつて西洋の実学を学ぶ「原書」科と、翻訳書によつて学ぶ「訳書」科、「数学」科、「習書」科が設けられ、慶應義塾から小幡篤次郎、浜野定四郎、須田辰次郎、松山棟庵、中上川彦次郎、猪飼麻次郎、手島春司といった教員が派遣された。中津出身の慶應義塾生がある程度学問が進むと、市学校に教授に出かけるといふこともあつたらしい。「訳書」科の設置は、いきなり英語だけで授業をするのは難しいため、小幡篤次郎の提案で盛り込まれたものであつた。学業の進歩を示す等級は三つに分かれていたという。明治五年には付属学校として女

子部が設立され、読み書きや算術、裁縫や礼儀作法などが教育されたほか、本科入学のための予備科として付属小学校が設立された。開校後、生徒数は順調に増え、明治六、七年から八、九年には付属学校を含めて六百名程度にもなったといわれている。校内では「弁説会」が開かれ、会議法が講じられ、椅子と机、洋装、洋食など西洋風の生活様式も取り入れられた。中津において欧米文化は常に市学校から発信されると目されていたとい⁽²⁸⁾う。中津市学校に学んだ広池千九郎の著書『中津歴史』（広池千九郎、明治二四年）によると、市学校内の様子は次のようなものであった。

明治初年ノ此世上未毫モ古休旧套ヲ脱セサルノ時ニ当リ本校教師等既ニ校内ニ弁説会ナルモノヲ開キ古老ノ士人亦往々来テ之ニ参列シ泰西新奇ノ演題ヲ掲ケテ互ニ討論演説ス又会議法ヲ講シ新聞紙ヲ読ミ自主自由ヲ談シ殖産興業ヲ説キ洋医ヲ尊ヒ衛生ヲ論シ時計ヲ携ヘ寒暖計ヲ置キ避雷柱ヲ設ケ椅子立机ヲ用ヒ洋服ヲ着靴ヲ穿キ蘭燈ヲ点シ巻煙草ヲ吸ヒ牛肉ヲ喰ヒ乳汁ヲ醸リ洋食ヲ賞シ麦酒ヲ飲ミ廢刀断髮夙ニ欧米ノ風化ヲ学ヒ文明ノ利器ヲ採用セシハ地方実ニ其淵源ヲ本校ノ内ニ発セサルモノナシト云⁽²⁹⁾

討論、演説、会議、新聞、自主自由、殖産興業、西洋医学、衛生、時計、寒暖計、避雷針、椅子、机、洋服、靴、蘭燈、巻煙草、牛肉、牛乳、洋食、麦酒、廢刀、断髮、と欧米の文化を学び、文明の利器を採用したのは地方にあって実に中津市学校であった。

福沢は明治十年に記した「旧藩情」緒言において、「旧藩地に私立の学校を設るは余輩の多年企望する所にし、既に中津にも旧知事の方禄と旧官員の周旋とに由て一校を立て、其仕組固より貧小なれども、今日までの成跡を以て見れば未だ失望の箇条もなく、先づ費したる財と労とに報る丈けの功をば奏したるものと云ふ可し」と中津市学校が一定の成果を挙げていると述べ、さらに「華族が……早く銘々の旧藩地に学校を立てなば、数年の

後は間接の功を奏して、華族の私の為にも藩地の公共の為に大なる利益ある可し」と市学校のような学校が各地に設立されることを希望し、さらに「旧藩情」が「幸に華族其他有志者の目に触れ、為に或は学校設立の念を起すことあらば幸甚と云ふ可きのみ」と記し、華族の教育事業への貢献とその拡大に期待を示した。それは華族の資産消失への危機感に裏打ちされたものであり、福沢は「今の諸華族が様々の仕組を設けて様々の事に財を費し、様々の憂を憂て様々の奇策妙計を運らさんよりも、寧ろ其財の未だ空しく消散せざるに当て」学校建設に投資してほしいと述べている。⁽³⁰⁾

中津市学校は明治八、九年頃までに「一時関西第一ノ英学校ナリト世上ニ公評ヲ博スルニ至レリ」となった⁽³¹⁾うだが、実学教育の点で問題が生じ、木挽、指物、鍛冶屋、飾屋などの実際に役立つ学問を身につけておらず、英語ばかり学んでいると福沢は感じるようになった。さらに周囲の公立学校が発展して、私学と異なつて徴兵猶予の特典が得られるようになると、そちらに生徒が流れるようになる。奥平や福沢、小幡篤次郎らは、新聞発行、演説館開設、養蚕事業、奨学金制度導入などの改革に取り組んだが、結局、学校自体は明治十六年に閉校することとなった。⁽³²⁾奥平自身は市学校を非常に重視していた⁽³³⁾ようので、明治十一年十月九日付の香川真一（大分県令）宛福沢書簡には、「中津の旧藩主並に旧士族がこの市校を金玉の如く思ふは当然の事」と記されている。⁽³³⁾その意味で、閉校は奥平にとつて痛手だったに違いない。

中津市学校について、木村政伸氏は、洋学校教師が不足するなか、旧藩主や旧藩士と福沢とが協力して、「純国産」の洋学校をつくり、中津士族に授産や立身出世のルートを提供したこと、⁽³⁴⁾に意義を見いだしている。⁽³⁵⁾佐伯友弘氏は、イギリスの市民社会をモデルとし、それを支えるブルジョアジーの養成を目指したこと、弁説会を開いて自主自由・殖産興業を論じ、近代西洋文明の輸入と普及に貢献し、自由民権運動の素地を築いたこと、⁽³⁶⁾などの意義を指摘している。⁽³⁶⁾閉校に際して演説した小幡篤次郎は、市学校が設立されたのは地方の人々に学校の標準

を示し、「未開ノ文運ヲ鼓舞誘導」するためだったが、いまや小中学校が設立されて市学校の使命は終わったとしつつ、「資本金ハ素ト教育資金ナルヲ以テ決シテ之ヲ他途ニ転用スヘカラスサレハ這般在京旧藩公福沢氏等ト相談シテ学生給費ノ制ヲ設ケ毎歳中津士族子弟ノ中ニ就キ秀才三名ヲ精選シ此資金中ヨリ修学費若干ヲ給スルノ制ヲ設ケタレハ猶学資金ノ性質ヲ失ハスシテ旧藩公育英ノ芳徳亦水泡ニ帰セサルヘシ」と語っている⁽³⁷⁾。実際、閉校後すぐに「開運社」という団体が組織され、市学校の残余金をもつて育英資金として、中津の秀才で学資が欠乏しているものを扶助して、地方の人材養成を図ることになった⁽³⁹⁾。黒屋直房氏は、「旧藩に対する啓蒙誘導の至情頗る濃かなり」と奥平を評している⁽⁴⁰⁾。

四、奥平昌邁の米国留学

中津市学校が設立された明治四年十一月、奥平の留学も実現の運びとなり、これに際して福沢は奥平昌邁名で「中津市学校之記」を立案し、次のように述べた。

学問ハ身ノタメニスベキナリ。人ノタメニスルニアラズ。況ヤ一時職分ノ軽重ニ由テ学問ニ勉不勉ノアルベキニ非ズ。乃チ又政府ニ願ヒ外国ノ遊学ヲ決シタレバ、願クバ旧藩ノ士民余ガ心事ヲ察シテ此度ノ挙動ヲ怪シム勿レ。

一、独り事ヲ為スハ衆ト共ニスルノ楽シキニ若カズ。余此度独リ外国ニ遊学スレドモ、旧藩内ノ士民モ余ガ志ヲ助ケ余ガ学ブ所ノ道ヲ学バントスルハ固ヨリ願フ所ナレバ、本県ノ吏人ニ謀リテ年々家禄ノ内五分ノ一ヲ費シ、旧藩士ノ積金ニ合シテ文学ノ資ト為シ、此度中津ニ一処ノ洋学校ヲ開キ、其外当県内ノ諸方ニ郷校ヲ設ルノ儀ヲ決シタレバ、旧藩ノ士族ハ勿論、百姓町人モ余ガ意ヲ体シテ勉強イタシ、三五年ノ後余モ亦外国ヨリ帰り、互ニ学業上達ノ上再会イタスベキ事、今ヨリ楽ム所ナリ。

自分は留学するが、旧藩の士民も学問の道を学び、中津市学校などで勉強して再会しよう——。大名華族自身が教育に従事することで、郷里の教育振興を図るというのも、福沢のねらいであった⁽⁴¹⁾。また、『福翁自伝』によると、「福沢が近來奥平の若殿様を誘引してアメリカにやろうなんという大反れた計画をしているのは怪しからぬ、不臣な奴だという罪状」で、福沢は帰省中に「中津の有志者即ち暗殺者」に殺されそうになったという⁽⁴²⁾。こうした反発が地元から出ていたことから、それを鎮める意味を込めてのメッセージでもあったろう⁽⁴³⁾。

かくして奥平は、米国に留学することとなる。その過程については、奥平に随行した小幡甚三郎が残した書簡などによって、うかがい知ることができる。福沢は奥平の随行者として甚三郎を推挙し、二人は明治四年十二月末に米国に向けて出発した⁽⁴⁴⁾。福沢のもとには翌年二月十九日に米国から手紙が届いており、二月二十日付福沢英之助宛書簡で福沢は、「小幡篤さんは中津、甚さんはアメリカ、何れも無事健康のよし。昨日アメリカより手紙参、殿様も甚さんもぶじ、ソルトレイキと申処迄参候よし」と伝えている⁽⁴⁵⁾。「小幡篤さん」とは、先述した小幡篤次郎のことで、甚三郎の兄であり、「甚さん」は甚三郎、「殿様」は奥平のことである。福沢は、この小幡兄弟に絶大な信頼を寄せており、兄には中津市学校を、弟には奥平の留学を任せたとと思われる⁽⁴⁶⁾。

甚三郎が篤次郎に宛てた明治五年四月八日付書簡によると、二人は二月十五日にサンフランシスコに到着し、十七日に同地を出発、ソルトレークシティーで岩倉使節団に追いつき、シカゴまで同行、その後使節団から別れて二十八日にニューヨークに到着した。三日間滞在ののち、コネチカット州ウィンチェスターに赴いたが、ここは「田舎」で、家も二十軒から三十軒程度、学校も発達しておらず、「日本ノ田舎ノ手習師匠ニ異ナルコトナシ」であったという。算術は「フラクシヨン」の「カラス」が第一等で、「リードル」の素読に困る人が多く、「田舎ノ有様」であった。気候も寒く、店舗も一軒しかなく、きわめて不都合な場所であった。甚三郎は一年間の修業

に五、六百両がかかると予想していたが、実際には儉約しても八、九百両なくては修業が成り立たないとしている。そこで二週間ほど思案した結果、別の場所に移るべきだと判断し、ニューヨーク州ブルックリンに行き、プライベート・レッスンを受けはじめたという。追々、「Polytechnic Institute」という学校で学ぶ予定であり、同校の「プレジデント」である「David H. Cochran」は、もともと別の場所で「ノルマルスクールのプレジデントを務めていた人物で、「ゲートマン」であり、「日本へ学問ノ要用ナルコト能ク承知シ、別段日本人へハ世話致シ呉レ、学校稽古ノ都合トテモ「スペインアルノ」自由ヲ与候由ニ付、当地へ落付申候。御安心可被下候」としている。甚三郎は、はじめての渡米で「インターブレター」や「セルヘント」などの役割も多く、自分の「スモールブレイン」が「エキスホース」してしまったと苦澁を吐露している。⁽⁴⁷⁾ 奥平の「セルヘント」としての任務が負担になっていたことが察せられる。⁽⁴⁸⁾ 翌日の母および「皆々様」宛ての書簡でも、甚三郎は「全く初旅ノ処へ言語ハ不通、連ハ大名連れ、余リ心配シ過キテ少シヨワリ候マテ」と述べており、やはり奥平の世話が精神的な負荷になっていたようである。同書簡には、奥平自身もブルックリンに来て落ち着いたようので、「奥平様モ御不快ナトハ決シテナクナリ大安心仕候」と記されている。⁽⁴⁹⁾ 西澤直子氏の指摘通り、それまでは不調や不平を訴え、甚三郎に気苦労させていたのであろう。なお、三日前から「少シノ都合ニヨリ暫クノ間ダ奥平様ト離レ、何れ長クモ二週間位也」と記しており、理由は不明ながら一時奥平とは別行動をとっている。⁽⁵⁰⁾

しかし、甚三郎はその後病にかかり、明治六年一月三十一日付のフィラデルフィアにある神経病院医師「ジョンス」の説明によれば、「身体大ニ疲れ、精神の働キモ全く乱レテ其異常ヲ変シ」、脳、脊髓、神経、筋力にも病が及び、遂に死去したことが記されている。⁽⁵¹⁾ 先述のコックランは、二月四日に篤次郎に宛てて報告書を送り、甚三郎病死の経緯を伝えているが、当初掛かっていた病院からフィラデルフィアの「神経病ノ治療ニ於テ我国第一ト申シ病院」に移ったのは奥平の進言によるもので、「奥平君申候ニハ、小幡ノ為ニハ此国ニテ最上ノ医者ニ掛

ケ、最上ノ療養致シ度、入費不苦とノ義ニ付、向ノ医者ニモ示談ニモ及ヒ候処、同人ヨリモ「ヒレデルヒヤ」ニ移リ候得ハ、御病人回復ノ望モ多カルヘシト申聞ケ、且奥平君ノ寛大ナル心ヨリ、費用ヲ不厭「ヒレデルヒヤ」ニテ最上ノ療養イタシ度トノ事ニ付、小生輩モ御病人ヲ彼ノ地ニ送り候事ニ一決イタシ候」と記されている。⁽⁵²⁾奥平がいかに甚三郎の病気を心配していたかが、察せられよう。しかしその甲斐なく、甚三郎は死去したわけである。四月四日、篤次郎は兄姉妹に宛てた書簡の中で、甚三郎が病中に友人に話した言葉を紹介しているが、そこには、「曰ク、奥平公ハ從順にして艶しき良心ある人なりと。又曰ク、予奥平公より戴キタル衣ヲ寝衣として病床ニ伏スコト、実ニ難有事なり」と述べられている。⁽⁵³⁾甚三郎にとって奥平は、忠誠の対象であり、どこまでも守らねばならない「大名」であつたにちがいない。⁽⁵⁴⁾

福沢は甚三郎の死に強い衝撃を受け、四月十五日付の島津復生宛書簡で、「仁三郎凶聞、四月二日東京に達し、私は其節家内一同、築氏並に多川さんと同道、箱根へ入湯中、江戸より為知、直様帰宅、唯々驚駭愁傷するのみ。同人は生涯の一親友、これまで共に謀りしことも多く、尚此後互に依頼して成すべき事共沢山有之、仁三郎君帰国の上は斯くも可致、ケ様にも可取計、此も彼もと、様々に後日の事のみ預め期して相楽み居り候処、豈図此度の一条、心中の百事一時に瓦解、何事も手に付不申、今日に至るまで日々夜々唯同様の愚痴を申暮し居候」と痛恨の心境を吐露した上で、「仁三郎君死去に付ては、昌邁様も独歩孤立、如何可致哉、芳蓮院様も深く御案じ、多川様も同様、然処昌邁様より多川さんへ御文通、一寸拝見いたし候処、此後一人にて一人の始末は出来候に付、附属のもの遣すに不及とあり」と記し、奥平が一人で孤立するのではと心配したが、奥平自身から一人でやっていけるので随行者の追加派遣はいらないとの書簡があつたとしているが、文中の芳蓮院や多川(昌邁の実母)の意向で、随行者を派遣するか派遣しないか、両論併記の形でアメリカに書簡を送つたという。なお、福沢は「此度の一条に付ては、殿様も御心配、病中御看病も行届、病院も入費を不顧上等の処へ入れたりとこの一時は昌邁君

の美徳、不幸の中にも聊心を慰め快く御座候」と奥平を賞賛している。⁽⁵⁵⁾

五月二十五日付の島津復生宛書簡では、「仁三郎君の死後、殿様より御状も参り、同君に代る者は不用なりとの趣に候得共、当地にては芳蓮院様多川様の所思にて、中々左様不参、御尤千万の事なり」と、結局、芳蓮院と多川の意向で甚三郎に代わる随行者を送ることとなり、当初は篤次郎が候補に挙がったものの、家の都合や年齢が長じていることなどから外され、結局「津田純一の外に無之」として津田を送ることとなった。⁽⁵⁶⁾津田は中津藩士の子として生まれ、慶應義塾に学んだ人物で、後述の通り奥平も明治六年末に帰国することとなったため、随行はできなかったが、渡米自体は実現し、明治七年四月に米国に渡り、翌年から十年までイエール大学で学び、十年にシシガン大学に移り、翌年に学位を取得することとなる。⁽⁵⁷⁾

さて、甚三郎の書簡にある「Polytechnic Institute」とは、ニューヨーク州ブルックリンにあった「Brooklyn Collegiate and Polytechnic Institute」のことで、同校の一八七二年七月版役員・学生名簿によると、同校は「Academic Department」と「Collegiate Department」で構成されており、前者の「Special Student」として「Okudaira, Masayuki」と「Obata, Zinzaburo」の名がある。工科大学という印象を受けやすいが、「Collegiate Department」は「Classical Course」「Scientific Course」「Liberal Course」「Commercial Course」に分けられており、かなり幅広い知識・教養を身につけられるカリキュラム構成となっていた。⁽⁵⁸⁾校長のコックラン自身、「Ph.D」と「LL.D」の学位を持つ歴史・哲学の教授である。他に日本人学生として、「Agee, Shoji Takato」「Azuma, Takahiko」「Fozomori, Suchiro」「Hayashi, Kushihiro」「Hirosama, Kenzo」「Kagawa, Motoi」「Matsuda, Shinsai」「Sakai, Tadakuni」「Sato, Mamotaro」「Takazu, Kuduma」「Takemoora, Kingo」「Yamada, Testuji」「Yangimoto, Naotaro」の名前が同じ「Special Student」欄にある。⁽⁵⁹⁾同資料はすでに塩崎智氏によって紹介されており、これらの人物はそれぞれ、江木高遠⁽⁶¹⁾、東隆彦（華頂宮博経）⁽⁶²⁾、藤森圭一郎⁽⁶³⁾、林糾四郎、広沢健

三、五十川基⁽⁶⁴⁾、松田晋斎、酒井忠邦、佐藤百太郎⁽⁶⁶⁾、高須慄、竹村謹吾、山田鉄次、柳本直太郎⁽⁶⁷⁾、であることが明らか⁽⁶⁸⁾にされている。このうち、甚三郎は松田、佐藤、竹村、江木、と親交を結んでおり、特に江木は最期まで付き添ったことがわかっており、おそらくは奥平とも親しかったのであろう。酒井は旧姫路藩主で、明治四年十月十三日に慶應義塾に入社、同年十二月から米國に留学していた。⁽⁷⁰⁾ 奥平ときわめてよく似た経歴の持ち主であり、両者にも交友関係があったものと推測される。また、旧彦根藩藩主である井伊直憲も弟で旧与板藩主の井伊直安⁽⁷¹⁾とともに明治五年十月から米國に留学し、ニューヨークに滞在しており、直憲の日誌によれば、奥平や甚三郎、酒井、華頂宮、藤森、江木、佐藤、高須、などと交流している。日誌を分析した鈴木栄樹氏は、「華族留學生のなかでも、酒井忠邦・奥平昌邁の二人は、直憲らのニューヨーク滞⁽⁷²⁾在期間をつうじて互いに行き来のあった人物である」と指摘している。直憲も甚三郎の死に衝撃を受けた一人であった。⁽⁷²⁾

なお、塩崎氏によると、「Special Student」は専任教師から個人・グループ指導を受け、英語力が認められれば一般学生として授業参加が許可されたという。⁽⁷³⁾ 奥平と小幡は先述の通り、当初はこの「Special Student」だったが、一八七三年度版の名簿によると、両者とも一八七二年九月から学校に正規入学し、「Academic Department」の三年に入れられた。小幡はこの年度中の一八七三年一月二十九日に死去したが、奥平はそのまま同校に在籍し、一八七三年九月からはじまる翌年度も、同じく三年であったことが、一八七四年度の名簿から確認できる。⁽⁷⁴⁾

後述の通り、奥平は一八七三年末に帰国し、一八七四年度は約三ヶ月しか在学していないため、一年間在籍してつた一八七三年度の「Academic Department」三年生の設置科目をみておこう。まず「First and Second Terms」は「Reading and Definition」「Spelling, dictation exercises」「English Grammar, to Syntax」「Latin Grammar through Verbs」「Written Arithmetic, Proportion and Percentage, and Interest」「Mental


Arithmetic, continued] 「Geography, and Map Drawing」 「Penmanship」 「Drawing」 「Composition and Declamation, bi-weekly exercises」 が設置されており、「Third and Forth Terms」 及び「Reading and Definition」 「Spelling」 「English Grammar, Analysis and Parsing」 「Latin Reader」 「Written Arithmetic completed」 「Mental Arithmetic completed」 「History of England, completed」 「Penmanship」 「Drawing」 「Composition and Declamation, bi-weekly exercise」 が置かれていた。奥平がこのうちの科目を履修したかは定かでないが、英語の読み、書き、文法などの学習に加え、ラテン語や算数、地理、書法、絵画、演説、英国史などが学べる環境にあったことがわかる。

なお、山崎有信氏は奥平が「米国に遊学し、同国ブルウクリン府に留り教師ゴックランに従つて政治経済等の諸学科を研究し学業大に進む⁽⁷⁶⁾」と伝えており、ゴックランに特に師事して政治経済等を学んでいたことがうかがえる。「Special Student」として指導を受けるのはもちろん、その後、正規生になってからも、個人的に政治経済等について教えを受けていたのである。おそらく小幡も同様で、それゆえにゴックランは熱心に看病をし、没後の報告書をしたためたものと思われる。

ゴックランは先述の通り、歴史・哲学の教授であり、学校では「logic」や「moral philosophy」 「International law」 「history」 「chemistry」を教えていた。一八二八年にニューヨーク州スプリングフィールドに生まれ、一八五〇年に「Hamilton College」を卒業したゴックランは、すぐに教育者としてのキャリアをスタートさせ、「Natural Sciences at Clinton Liberal Institute」の教授となった。その後、「Fredonia Academy」の校長、次いでニューヨーク州唯一の教員養成学校であった「State Normal School at Albany」の校長となり、一八六四年、「Brooklyn Polytechnic Institute」の校長に転じた。以後、三十五年にわたって、同校の校長を務めることとなる。ゴックランの時代は「Reign of David」と呼ばれ、「the Doctor」 「Old Davy」 「Cockey」など

のニックネームで、教員や学生から尊敬を集めたという。⁽⁷⁷⁾

「Brooklyn Collegiate and Polytechnic Institute」は一八五五年九月に開校した男子校で、開校初年度は九歳から十七歳までの計二百六十五人が入学した。各学年の生徒数は、「Academic Department」(四年制・前半)が百二十〇百三十人、「Collegiate Department」(四年制・後半)が一コース三十人から四十人ほどで、少人数教育が実施されていたという。「Collegiate Department」を経て、ハーバード大学やイエール大学などの大学に進学する者もあり、工学校、専門学校としての側面と、進学校としての側面を併せ持っていた。⁽⁷⁸⁾ 奥平の名前は先述通り、一八七二年度版と一八七三年度版、一八七四年度版の名簿には記載があるものの、一八七一年度版および一八七五年度版には掲載されていない。⁽⁷⁹⁾ 後述の通り、奥平は一八七三年末に病氣療養のため帰国しており、渡航したのは一八七一年末であるため、在学していたのは一八七二年度(一八七一年九月～一八七二年六月)の途中から、一八七四年度(一八七三年九月～一八七四年六月)の途中までであった。

New York University Tandon School of Engineering Bern Dibner Library of Science and Technology のリンドセイ・アンダーバーグ氏の⁽⁸⁰⁾教示によれば、同校はブルックリンの「99 Livingston Street」に設立され、その後すぐに、隣接する「85 Livingston Street」に校舎を増設、一九五七年に「Jay Street」に移転するまじのキャンパスが使用された(「Livingston Street」の旧キャンパスの校舎は現存しない)。奥平が学んだ「Livingston Street」の校舎の写真は、 図1の通りである。

学校では、英語の徹底的な暗唱が行われ、日本人留学生は忍耐強く学び、教師を質問攻めにしており、毎月試験があつて互いに切磋琢磨していたという。⁽⁸⁰⁾ コックランは篤次郎に、「日本ノ遊学生」は、勉強に熱心になりすぎて身体の健康を顧みないので、彼らを集めて健康のため運動を欠かさなと諭し、睡眠時間を確保するよう忠告したと述べているが、⁽⁸¹⁾ 奥平もその例に漏れなかつたのであろう。

図1 Brooklyn Collegiate and Polytechnic Institute



Poly Archives, NYU Libraries

五、むすびに代えて——社会主義批判の先駆者として——

かくして奥平は米国での修学を続けたが、明治十三年に東京府会議員となり、翌年に東京府芝区長に就任したが、府知事の芳川顕正と意見が合わずに辞職、十七年十一月二十六日に肺を病んで没した。中津に対しては、中津市学校のみならず、中津―日田間道路開鑿にも出資している。聡明な人物であり、病気になるなければ米国へ特

命全権公使として赴任する話もあったといふ。⁽⁸³⁾

この間、おそらくは留学中の学習成果を生かして、政治経済についての意見を開陳している。明治七年十月二十三日には、大蔵省に對し、「外債償却意見」との意見書を提出した。⁽⁸⁴⁾ 明治十一年三月二十二日付『郵便報知新聞』には、「富ノ不平均ハ国力ヲ萎靡スルノ論」と題する投書を寄せ、「人ノ貧富」は「人類ノ実力上ヨリ生スル所ノ現象ナレバ人類ノ実力相平均スルニ非サルヨリハ焉ソ之ヲ平均スルヲ得ン況ンヤ人為ノ嚴法ノ如キニ於テヤヤ若シ猥リニ之ヲ猛行敢為スルトキハ人類開進ノ元素トモ云フ可キ貴重ナル勉強力ト蓄積心トヲ併セテ之ヲ失墜シ為メニ邦国ニ荼毒スル」と法律による富の平均化に反対し、米国を模範として、「遺産分派法」によって親戚、血縁者に「富ヲ分割スル」ことで、将来的に「百万ノ富モ亦漸々国内二分換セサルヲ得ズ」と提案している。⁽⁸⁵⁾ 西田長寿氏は、社

会主義思想・運動が無視し得ない傾向として日本のジャーナリズムの世界で取り上げられはじめたのは明治十年以後としており、奥平が「遺産相続法に言及しているのはアメリカ留学の所産と考えられる」と指摘している。⁽⁸⁶⁾奥平は米國留学の成果として本投稿を発表し、日本において社会主義思想が広がりはじめた劈頭で、その弊害を指摘し、富の分散のための遺産相続を提案したわけである。社会主義・共産主義についての批判的視座はその後も継承されており、十四年六月十九日には、明治会堂で「革命党の通弊」と題して演説することが報じられている。⁽⁸⁷⁾

明治十六年六月二十五日と十七年五月二十一日には、三所神社の祭日にあわせて、三田の奥平邸に旧中津藩人を集めて祭典を開くなど、旧中津藩出身者にとつては精神的支柱であった。明治十年十一月に中津で国立銀行が発足する計画があった際には、「奥平様出金の義、殿様御思召伺候処、中津の事とあれば如何様にも助力可然との御沙汰に付、銀行開業迄には一万円出来可申候」と中津のために一万円を出資する意向を示している。天保義社の資金の運用をめぐる中津士族社会間で対立が発生し、明治十六年十一月頃に法廷闘争にまで発展しそうになると、奥平が最終的に事態を收拾している。⁽⁹⁰⁾

奥平が没した際、『東京経済雑誌』は次のような追悼文を掲げている。

同君は去月二十六日肺病を以て逝去せられたり君広く朝野の名士に交はられ府會議員となり芝区長となりて常に民利を計られたり東京府庁が避病院を芝区に開かる、や君故ありて職を辞せり弊社田口も莫逆の交を辱うし談論終日倦むを知らず蓋し自然の愛を備へられたるならん今ま之を失するは国家の名士を失ふものと云ふべし享年三十有一皇天何ぞ残なるや葬礼の日君の棺を送るもの東京大学の教官及び在野の学士府會議員芝区民等多し華族の葬礼にして此種の人の多く棺に従ふは未だ嘗て見ざる所なり⁽⁹¹⁾

同誌を主宰していた田口卯吉とも莫逆の友であったという奥平は、常に「民利」を計り、市民から慕われた華族であった。『朝日新聞』（大阪版）も、「今の大名華族中には錚々の名声高き人なりしが不幸短命にして死す誠に惜しむべき事なり」と報じている。⁽⁹²⁾ 明治十七年六月に奥平が一時危篤に陥って回復した際には、福沢は長男・一太郎宛の六月六日付書簡で、「本月一日ヨリ奥平昌邁様事、肺炎之症状ニ而一時ハ危篤ト申ス程ニ有之候処、昨日ヨリ大ニ持直し、先ツ安心之姿ニ相成候」と述べており、奥平の病状に一喜一憂していた様子がうかがえる。その死は大きなショックであったにちがいない。

わずか三十年の生涯であったが、福沢に支えられながら、その期待である地域社会発展に貢献し、海外留学にも取り組んで社会主義批判の先駆者となった奥平の事例は、貴族院などの政治活動とは異なった形での、華族による近代化への貢献の一事例であるといえよう。

(1) 西澤直子「奥平昌邁」(福沢諭吉事典編集委員会編『福沢諭吉事典』慶應義塾、平成二年)、四六八頁。奥平が政府に提出した東京遊学の申請書は、黒屋直房『中津藩史』(国書刊行会、昭和六二年)、四二二―四二三頁、に掲載されている。

(2) 慶應義塾一五〇年史資料集編集委員会編『慶應義塾一五〇年史資料集1 基礎資料編…塾員塾生資料集成』(慶應義塾、平成二四年)、一六三頁。

(3) 前掲「奥平昌邁」、四六八頁。

(4) 石河幹明『福沢諭吉伝』第二卷(岩波書店、昭和七年)、一二三頁。

(5) 富田正文『福沢諭吉の漢詩三五講』(福沢諭吉協会、平成六年)、一六七―一七〇頁、拙著『福沢諭吉の政治思想』(慶應義塾大学出版会、平成二四年)、一八三頁。

(6) 福沢諭吉『新訂 福翁自伝』(岩波文庫、昭和五三年)、二八九―二九〇頁。

(7) 前掲『福沢諭吉伝』第二卷、一一八―一九頁、前掲『福沢諭吉の政治思想』、一四六頁。

- (8) 明治六年四月一日付福沢諭吉・島津復生宛書簡(慶應義塾編『福沢諭吉書簡集』第一卷、岩波書店、平成三年)、二六一頁、前掲『福沢諭吉の政治思想』、一四六―一四七頁、拙稿『福沢諭吉の華族論』(寺崎修編『福沢諭吉の思想と近代化構想』慶應義塾大学出版会、平成二〇年、所収)、一六五頁。
- (9) 慶應義塾編『福沢諭吉全集』第二〇巻(岩波書店、昭和四六年)、一六〇頁。
- (10) 西澤直子「奥平家の資産運用と福沢諭吉」新資料・島津復生宛福沢諭吉書翰を中心として(『近代日本研究』第一巻、平成七年三月)、二〇二―二〇三頁、前掲『福沢諭吉の華族論』、一六五頁。
- (11) 代表的な研究成果として、内山一幸「明治期の旧藩主家と社会―華士族と地方の近代化」(吉川弘文館、平成二七年)、熊澤恵里子「越前松平康莊の英国留学と試農場の創設」(『地方教育史研究』第三四号、平成二五年)、友田昌宏「明治期における旧藩君臣関係の諸相―米沢藩を事例として」(『歴史』第一二六号、平成二八年四月)、内藤一成「大名華族と旧臣会をめぐる若干の考察」(『九州史学』第一五九号、平成二三年九月)、野島義敬「黒田侯爵家と同郷組織」(『福岡市博物館研究紀要』第二七号、平成三〇年)、野島義敬「大正・昭和期における有馬頼寧と「旧藩地」人脈の形成」(『九州史学』第一五九号、平成二三年九月)、鈴木栄樹「最後の彦根藩主井伊直憲の西洋遊学―一大名華族の西洋体験」(佐々木克編『幕末維新の彦根藩』彦根市教育委員会、平成一三年、所収)、拙稿「黒田侯爵家と地域社会―育英事業をめぐる」(『法学研究』第九一巻五号、平成三〇年五月)、拙稿「福沢諭吉の地域開発論と華族―中津・延岡・福岡を例に」(『九州史学』第一五九号、平成二三年九月)、拙著『評伝 岡部長職―明治を生きた最後の藩主』(慶應義塾大学出版会、平成一八年)、などがある。
- (12) 西澤直子「小幡甚三郎のアメリカ留学―福沢研究センター所蔵資料紹介」(『近代日本研究』第一四巻、平成一〇年三月)、同「小幡甚三郎のアメリカ留学」(『福沢手帖』第一八三号、令和元年一二月)。
- (13) 明治一六年一月二日付福沢諭吉・鈴木閑雲宛書簡(慶應義塾編『福沢諭吉書簡集』第四巻、岩波書店、平成一三年)、二八―二九、三五―三五四頁、前掲『福沢諭吉の政治思想』、一八三頁、前掲『福沢諭吉の華族論』、一六五頁。

(14) 前掲『福沢諭吉伝』第二巻、一〇―一二三頁。

(15) 明治二二年四月五日付福沢諭吉・山口広江宛書簡(慶應義塾編『福沢諭吉書簡集』第六巻(岩波書店、平成一四

- 年)、六一八頁、前掲『福沢諭吉の政治思想』、一四七、一八三頁、前掲「福沢諭吉の華族論」、一六五—一六六頁。
- (16) 山崎有信氏によると、昌邁は「人に接するや貴賤を論ぜず誠意を以て之を遇し、旧藩時代と雖も尚群臣と其の席を同うして相對し、維新の後には益々簡易を旨とし、喜んで旧藩士民を延見せり」(山崎有信『豊前人物誌』国書刊行会、昭和五六年、三七〇頁)というから、こうした姿勢を福沢は九八郎にも受け継がせたかったのかもしれない。
- (17) 明治二年五月一日付福沢諭吉・奥平九八郎宛書簡(前掲『福沢諭吉書簡集』第六卷)、一四—一五頁、前掲『福沢諭吉の政治思想』、一八三—一八四頁、前掲『福沢諭吉の華族論』、一六六頁。
- (18) 詳しくは前掲『福沢諭吉の政治思想』第五章・第六章など、参照。
- (19) 前掲「奥平昌邁」、四六八頁。「華族を武辺に導くの説」に対する奥平の反対意見については、前掲『福沢諭吉の政治思想』、一八〇—一八一頁、参照。
- (20) 「奥平昌邁洋学校取設方并洋行願」(「公文録」明治四年・第一五七卷・辛未一〇月・東京府何華族下、国立公文書館蔵)。
- (21) 前掲「奥平昌邁洋学校取設方并洋行願」、前掲『福沢諭吉の政治思想』、一三八—一三九頁。
- (22) 詳しくは前掲『福沢諭吉の政治思想』第五章・第六章など、参照。
- (23) 前掲『福沢諭吉伝』第二卷、一〇九頁。
- (24) 内閣官報局『法令全書』明治四年、三六四頁。
- (25) 前掲『法令全書』明治四年、三七一—三七二頁。
- (26) 前掲『福沢諭吉の政治思想』、一四〇頁、拙稿「初期慶應義塾における旧藩主—廃藩置県後の入社をめぐる」(『福沢諭吉年鑑』第三〇号、平成一五年一二月)、五三—五四頁。
- (27) 石附実『近代日本の海外留学史』(中公文庫、平成四年)、一九五—一九九頁。
- (28) 前掲『福沢諭吉書簡集』第一卷、三八六—三八七頁、前掲『福沢諭吉の政治思想』、一三八—一三九頁、西澤直子「中津市学校に関する考察」(『近代日本研究』第一六卷、平成一二年三月)、六八—七六頁。
- (29) 広池千九郎『中津歴史』(広池千九郎、明治二四年)、三〇八頁。
- (30) 慶應義塾編『福沢諭吉全集』第七卷(岩波書店、昭和四五年)、二六三—二六四頁、前掲『福沢諭吉の政治思想』、

一七一頁。福沢は、中津市学校の発展が上下関係にとらわれがちな士族社会の刷新に寄与したとして、市学校の意義に自信をもっていた(西澤直子『福沢諭吉とフリーラヴ』慶應義塾大学出版会、平成二六年、一一六頁)。

(31) 前掲『中津歴史』、三〇七頁。

(32) 前掲「中津市学校に関する考察」、七九—九六頁、前掲『福沢諭吉の政治思想』、一七一頁、前掲『福沢諭吉とフリーラヴ』、一一九—一二二頁。

(33) 明治二一年一〇月九日付福沢諭吉・香川真一宛書簡(慶應義塾編『福沢諭吉書簡集』第二卷、岩波書店、平成三年)、一〇二頁。

(34) 木村政伸「中津市学校にみる明治初期洋学校の地域社会における歴史的役割」(『日本教育史研究』第九号、平成二年)、二〇—四一頁。

(35) 前掲『福沢諭吉の政治思想』、一七一頁。

(36) 佐伯友弘「明治初期における福沢諭吉の大分県への影響—中津市学校の成立過程について」(『鳥取大学教育学部研究報告 教育学』第二四号、昭和五七年一〇月)、三一—五頁。

(37) 前掲『中津歴史』、三〇八—三〇九頁。

(38) 前掲『福沢諭吉の政治思想』、一七一頁。

(39) 前掲『豊前人物誌』、三七二頁、前掲『中津藩史』、四二六頁、前掲『中津歴史』、三一〇頁。

(40) 前掲『中津藩史』、四二七頁。

(41) 多田健次「中津市学校之記—新資料紹介」(『福沢手帖』第二号、昭和五二年三月)、一三一—一六頁、西澤直子『福沢諭吉の近代社会構想と中津』(『モラロジー研究』第七九号、平成二九年五月)、一六一—一八頁、前掲『福沢諭吉の政治思想』、一三九頁。これは中津市学校の趣意書であり、奥平昌邁名ではあるが、福沢の筆になったものといわれている(前掲「中津市学校之記—新資料紹介」、九—一〇頁)。これが福沢の起草に拠ることは、加筆原稿が残されていることや、この時期の他の著作との比較からみてあきらかであると西澤直子氏も指摘している(前掲「中津市学校に関する考察」、六六頁)。

(42) 前掲『新訂 福翁自伝』、二二二—二二三頁。

- (43) 前掲『近代日本の海外留学史』、二〇二頁。
- (44) 前掲「小幡甚三郎のアメリカ留学」福沢研究センター所蔵資料紹介、一四七頁。小幡の経歴については、同論文参照。
- (45) 明治五年二月二〇日付福沢諭吉・福沢英之助宛書簡（前掲『福沢諭吉書簡集』第二巻）、一二二頁。
- (46) 前掲「小幡甚三郎のアメリカ留学」福沢研究センター所蔵資料紹介、一五四頁。
- (47) 前掲「小幡甚三郎のアメリカ留学」福沢研究センター所蔵資料紹介、一五六―一五八頁。
- (48) 塩崎智氏は「奥平の身の回りの世話、金銭の管理など、殿様の随行ならではの気苦労が絶えなかった。……奥平の面倒を見るために、英語の用事は全て小幡が行う。言葉のトラブルは頻繁に起こっていただろう」と指摘する（塩崎智「ブルックリンに死す―彼の地に倒れた幕末維新留学生たち」『青淵』第七〇五号、平成一九年二月、三二頁）。
- (49) 前掲「小幡甚三郎のアメリカ留学」福沢研究センター所蔵資料紹介、一五〇頁。
- (50) 前掲「小幡甚三郎のアメリカ留学」福沢研究センター所蔵資料紹介、一五八―一五九頁。
- (51) 前掲「小幡甚三郎のアメリカ留学」福沢研究センター所蔵資料紹介、一六〇頁。これは、ジョンズ医師の容態書を英語の読めない姉妹のために篤次郎が和訳したものである（同、一四四頁）。甚三郎はニュージャージー州ニューブランズウィックのウイロウ・グローブ墓地に埋葬された。小幡の葬儀および墓地の現状については、結城大佑「福沢諭吉をめぐる人々―（その一）小幡甚三郎」『三田評論』第一二〇九号、平成二九年三月）、山内慶太「慶應義塾史跡めぐり（第二七回）アメリカに眠る義塾の「亀鑑」―小幡甚三郎と馬場辰猪の墓所」『三田評論』第一二一五号、平成二〇年八・九月）、同「アメリカに小幡甚三郎と馬場辰猪の墓を訪ねて」『福沢手帖』第九五号、平成九年二月）、セルマン・A・ワックスマン「小幡甚三郎の墓」『三田評論』第五五七号、昭和二八年五月）など、参照。
- (52) 前掲「小幡甚三郎のアメリカ留学」福沢研究センター所蔵資料紹介、一六〇―一六一頁。これも、コックランの報告書を篤次郎が和訳したものである（同、一四四頁）。
- (53) 前掲「小幡甚三郎のアメリカ留学」福沢研究センター所蔵資料紹介、一六一―一六三頁。
- (54) 西澤直子氏も、奥平と甚三郎の関係について「封建的主従関係」や「封建的情誼」が残っていたと指摘している

- (前掲「小幡甚三郎のアメリカ留学」、一九頁)。
- (55) 明治六年四月一五日付福沢諭吉・島津復生宛書簡(前掲『福沢諭吉書簡集』第一卷)、二六〇—二六一頁。
- (56) 明治六年五月二五日付福沢諭吉・島津復生宛書簡(前掲『福沢諭吉書簡集』第一卷)、二六二—二六三頁。
- (57) 西澤直子「津田純一」(前掲『福沢諭吉辞典』)、五三三頁、「エル大学日本人留学生名簿」(Manuscripts and Archives at Yale University Library)。津田の派遣については、富田正文「小幡甚三郎の死—ワックスマン博士の寄書について」(『三田評論』第五五八号、昭和二八年七月)、も参照。
- (58) 「Academic Department」及「Collegiate Department」は一八九〇年に分離し(塩崎智「幕末維新在ブルックリン(NY州)日本人留学生関連資料集成及び考察(一)」、『拓殖大学語学研究』第一一四号、平成一九年三月、一二九頁)、前者は現在「Poly Prep Country Day School」となり、後者は現在「New York University Tandon School of Engineering」となっている。
- (59) 例えば江木高遠は、英文文、作文演習、弁論術、古代史、代数学、幾何学、自然地理学、化学、市民政治学、政治経済史、近代史、を履修している。西澤氏は、華族が入学した背景には、「Polytechnic Institute」が社会のリーダーとなるにふさわしい教養に力を注いでくれたことがある」と指摘している(前掲「小幡甚三郎のアメリカ留学」、一六頁)。
- (60) *Seventeenth annual catalogue of the Officers and Students of the Brooklyn Collegiate and Polytechnic Institute, June 1872* (Brooklyn: Daily Union Job Printing Establishment, 1872), pp.4-43. なお、地元の新開記事によれば、奥平と小幡が入学したのは、一八七二年の三月二十八日である(*The Brooklyn Union*, 29 March 1872)。この記事については、西澤直子「小幡甚三郎のアメリカ留学 追記」(『福沢手帖』第一八五号、令和二年六月)、三〇—三二頁、参照。
- (61) 江木の留学については、前掲「小幡甚三郎のアメリカ留学」、一六頁、前掲「ブルックリンに死す—彼の地に倒れた幕末維新留学生たち」、三〇—三三頁、塩崎智「幕末維新在ブルックリン(NY州)日本人留学生関連資料集成及び考察(二)」—Brooklyn Dairy Eagle 紙掲載記事「Our Japanese Students」(ブルックリン在住日本人留学生)の概説と関連情報」(『拓殖大学語学研究』第一一六号、平成一九年十二月)、一三三—一五三頁、同「幕末維新在ブ

- ルックリン (NY州) 日本人留学生関連資料集成及び考察 (三) — 主に一八七〇年度 B P I 卒業式と高戸賞士インタビュー記事について」(『拓殖大学語学研究』第一一七号、平成二〇年三月)、三三一—五六頁、参照。
- (62) 華頂宮の留学については、前掲「幕末維新在ブルックリン (NY州) 日本人留学生関連資料集成及び考察 (二) — Brooklyn Dairy Eagle 紙掲載記事 “Our Japanese Students” (ブルックリン在住日本人留学生) の概訳と関連情報」、一三三—一五三頁、参照。
- (63) 藤森の留学については、前掲「幕末維新在ブルックリン (NY州) 日本人留学生関連資料集成及び考察 (二) — Brooklyn Dairy Eagle 紙掲載記事 “Our Japanese Students” (ブルックリン在住日本人留学生) の概訳と関連情報」、一三三—一五三頁、参照。
- (64) 広沢の留学については、重松優「広沢真臣の子、健三のアメリカ留学について」(『学苑』第九三〇号、平成三〇年四月)、六五—七二頁、参照。
- (65) 五十川の留学については、前掲「幕末維新在ブルックリン (NY州) 日本人留学生関連資料集成及び考察 (二) — Brooklyn Dairy Eagle 紙掲載記事 “Our Japanese Students” (ブルックリン在住日本人留学生) の概訳と関連情報」、一三三—一五三頁、前掲「ブルックリンに死す—彼の地に倒れた幕末維新留学生たち」、三二頁、参照。
- (66) 佐藤の留学については、前掲「最後の彦根藩主井伊直憲の西洋遊学—大名華族の西洋体験」、二二二頁、参照。
- (67) 柳本の留学については、前掲「幕末維新在ブルックリン (NY州) 日本人留学生関連資料集成及び考察 (二) — Brooklyn Dairy Eagle 紙掲載記事 “Our Japanese Students” (ブルックリン在住日本人留学生) の概訳と関連情報」、一三三—一五三頁、参照。
- (68) 前掲「幕末維新在ブルックリン (NY州) 日本人留学生関連資料集成及び考察 (二)」、一二四—一二五頁。このうち、五十川、酒井、高須、松田、柳本は慶應義塾出身であり、高須は旧姫路藩士族で旧姫路藩主の酒井に随行人物で、西澤氏は、その名を「高須鷲」としている (前掲「小幡甚三郎のアメリカ留学」、一四—一九頁)。
- (69) 前掲「小幡甚三郎のアメリカ留学—福沢研究センター所蔵資料紹介」、一四八頁。
- (70) 前掲「初期慶應義塾における旧藩主—廃藩置県後の入社をめぐって」、六四頁。
- (71) 井伊直安は明治四年一〇月一三日に慶應義塾に入社し、その上で、西洋視察に出ている (前掲「初期慶應義塾に

おける旧藩主—廢藩置県後の入社をめぐる」六四—六五頁。

- (72) 前掲「最後の彦根藩主井伊直憲の西洋遊学—大名華族の西洋体験」二一六—二二四頁。なお、直憲と直安も一八七二年九月には「Brooklyn Collegiate and Polytechnic Institute」の「Special Student」となっている（前掲「幕末維新在ブルックリン（NY州）日本人留学生関連資料集成及び考察（一）」一二五—一二六頁）。
- (73) 前掲「ブルックリンに死す—彼の地に倒れた幕末維新留学生たち」三二頁。
- (74) 前掲「幕末維新在ブルックリン（NY州）日本人留学生関連資料集成及び考察（二）」一二五頁、前掲「ブルックリンに死す—彼の地に倒れた幕末維新留学生たち」三二頁。
- (75) *Eighteenth annual catalogue of the Officers and Students of the Brooklyn Collegiate and Polytechnic Institute. June 1873* (Brooklyn: Daily Union Job Printing Establishment, 1873), p.22.
- (76) 前掲『豊前人物誌』三七〇頁。
- (77) 前掲「小幡甚三郎のアメリカ留学」一五一—一六頁、Jeffrey L. Rodengen, *Changing the World: Polytechnic University, The First 150 years* (Fort Lauderdale: Write Stuff Enterprises, 2005), pp.32-37. "Dr. David H. Cochran Dead: Educator Was President of Polytechnic Institute of Brooklyn for 35 Years" *New York Times*, October 5 1909.
- (78) 前掲「幕末維新在ブルックリン（NY州）日本人留学生関連資料集成及び考察（一）」一二八—一二九頁。
- (79) 前掲「幕末維新在ブルックリン（NY州）日本人留学生関連資料集成及び考察（二）」一二四—一二六頁。なお、津田純一の名前は、一八七四年度版および一八七五年度版にはみられない（同前）。甚三郎とは違って、奥平とは異なる学校に通った上で、イェール大学に進学したのであろう。津田の米國留学については、別稿に譲りたい。
- (80) 前掲「ブルックリンに死す—彼の地に倒れた幕末維新留学生たち」三三頁、前掲「幕末維新在ブルックリン（NY州）日本人留学生関連資料集成及び考察（二）」Brooklyn Dairy Eagle 紙掲載記事“*Our Japanese Students*”（ブルックリン在住日本人留学生）の概訳と関連情報」一三一—一四〇頁。
- (81) 前掲「小幡甚三郎のアメリカ留学—福沢研究センター所蔵資料紹介」一六〇頁。
- (82) 「奥平昌邁米國ヨリ帰朝届」（公文録）明治六年・第二二五卷・明治六年二月・東京府伺（下）華族、国立公

文書館蔵)。

(83) 前掲「奥平昌邁」、四六八頁。奥平は品川の清光院に葬られた(『読売新聞』明治一七年一月二七日付朝刊)。墓所は現在も変わっていない。

(84) 「松方家文書」(国立公文書館蔵)。

(85) 『郵便報知新聞』明治一一年三月二二日付朝刊。同投稿は、明治文化研究会編『明治文化全集』第三卷・社会篇(下)(日本評論社、平成五年)、六五―六六頁、にも収録されている。

(86) 西田長寿「解題」(前掲『明治文化全集』第三卷・社会篇(下))、三一―三七頁。

(87) 『読売新聞』明治一四年六月一八日付朝刊。

(88) 『読売新聞』明治一六年六月二三日付朝刊、一七年五月二〇日付朝刊。

(89) 明治一〇年一月二六日付福沢諭吉・島津復生宛書簡(前掲『福沢諭吉書簡集』第二卷)、二九頁。

(90) 前掲「福沢諭吉の近代社会構想と中津」、一二―二三頁、前掲『福沢諭吉とフリーラヴ』、一三〇―一三一頁、西澤直子「天保義社に関わる新収福沢書翰(鈴木閑雲宛)」(『近代日本研究』第三卷、平成九年三月)、一二三―一四四頁。

(91) 「伯爵奥平昌邁君」(『東京経済雑誌』第二四三号、明治一七年二月六日)、七七〇頁。

(92) 『朝日新聞』(大阪版)明治一七年一月三〇日付朝刊。

(93) 明治一七年六月六日付福沢諭吉・福沢一太郎宛書簡(前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷)、一五一頁。

〔追記〕 本稿の執筆にあたり、New York University Tandon School of Engineering Bern Dibner Library of Science and Technology のリンドセイ・アンダーバーグ氏、New York University Tandon School of Engineering Poly Archives & Special Collections のゾー・ブレッチャャー・コーヘン氏、および慶應義塾福沢研究センター教授の西澤直子氏より、貴重な史料提供とご教示を受けた。記して感謝申し上げる次第である。